

石川県立中央病院がん治療施設整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

金沢市

# 南新保E遺跡

2011

石川県教育委員会  
(財)石川県埋蔵文化財センター

みなみ しん ぼ い せき  
南 新 保 E 遺 跡

2011

石 川 県 教 育 委 員 会  
(財)石川県埋蔵文化財センター

## 例 言

- 1 本書は南新保E遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は金沢市鞍月東2丁目地内である。
- 3 調査原因は石川県立中央病院が治療施設整備工事であり、同事業を所管する石川県立中央病院が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成21(2009)年度～平成22(2010)年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書原稿執筆および報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、石川県立中央病院が負担した。
- 6 現地調査は平成21年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。  
期 間 平成21年10月28日～同年12月11日  
面 積 730㎡  
担当課 調査部県関係調査グループ  
担当者 松山和彦(主幹)、稲葉浩一(嘱託調査員)
- 7 出土品整理は平成22年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。
- 8 報告書刊行は平成22年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。編集・執筆は松山(企画部資料管理グループリーダー)が行った。
- 9 調査には下記の機関・個人の協力を得た。  
石川県立中央病院
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書の凡例は下記のとおりである。
  - (1)方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ類に準拠した。
  - (2)水平基準は海拔高であり、T. P. (東京湾平均海面標高)による。
  - (3)出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

# 目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 現地調査の経過	1
第3節 出土品整理・報告書刊行	1
第2章 周辺の遺跡	2
第1節 本遺跡の既往の調査	2
第2節 南新保C遺跡の既往の調査	2
第3章 遺 構	3
第1節 概 要	3
第2節 自然河道	3
第3節 井 戸	3
第4節 溝	5
第4章 遺 物	6
第1節 弥生土器	6
第2節 土師器	6
第3節 須恵器	6
第4節 石器	7
第5節 木製品	7
第5章 総 括	7

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	……本頁
第2図 調査区位置図	…… 1
第3図 周辺の道跡	…… 2
第4図 調査区全体図	…… 4
第5図 遺構図	…… 5
第6図 土器実測図	…… 8
第7図 石器・木製品実測図	…… 9

## 表目次

第1表 土器一覧表	……10
第2表 石器一覧表	……10
第3表 木製品一覧表	……10



第 1 図 遺跡位置図

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

本調査は、石川県立中央病院によるがん治療施設整備工事を原因とする。石川県立中央病院と石川県教育委員会文化財課による協議の結果、工事の影響が及ぶ730㎡について、発掘調査を実施し、記録保存を行うことになった。石川県立中央病院は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は財団法人石川県埋蔵文化財センターに発掘調査を委託した。

## 第2節 現地調査の経過

平成21年10月末より事前準備に着手し、11月4～5日に重機による表土除去を行った。11月9日より作業員による調査を開始し、翌10日に遺構検出を終え、11日からは遺構掘削を進めた。11月20日からは遺構掘削と並行して実測作業を行い、26日に全景の撮影を行った。

12月1日にはラジオコントロール・ヘリコプターによる撮影を実施し、4日に発掘機材を撤出した。12月7・8日の2日間で重機による埋戻しを実施し、11日に現地の引渡しを行った。

## 第3節 出土品整理・報告書刊行

平成22年度に調査部関係グループが所管して出土品整理、報告書の作成・刊行を行った。

○調査体制(平成21年度)		○整理体制(平成22年度)	
調査期間	平成21年10月28日～同年12月11日	整理期間	平成22年7月12日～同年7月15日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター(理事長 中西吉明)	整理主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター(理事長 竹中博康)
総括	黒崎空作(専務理事)	総括	橋本 演(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長)	事務	栗山正文(事務局長)
総務	笠原利雄(総務グループリーダー)	総務	浅香順晴(総務グループリーダー)
経理	谷内孝夫(総務グループ専門員)	経理	谷内孝夫(総務グループ主幹)
	湯尻修平(所長)		三浦純夫(所長)
調査	三浦純夫(調査部長)	調査	福島正実(調査部長)
	伊藤雅文(関係調査グループリーダー)		伊藤雅文(関係調査グループリーダー)
担当	松山和彦(関係調査グループ主幹)	担当	松山和彦(資料管理グループリーダー)
	稲葉浩一(関係調査グループ嘱託調査員)		



第2図 調査区位置図(S=1/5,000)

## 第2章 周辺の遺跡

本遺跡周辺の地理的環境及び歴史的環境については、金沢西部地区土地区画整理事業に係る本遺跡及び南新保C遺跡の発掘調査報告書(文献A・B)で詳述されたところである。ここでは本遺跡及び南新保C遺跡の既往の発掘成果について再度振り返ることにしたい。

### 第1節 本遺跡の既往の調査

平成7～8年度に今回の調査区の北西側が調査されている(第2図参照)。まず古いところでは弥生時代中期から古墳時代前期にかけての旧河道2条がみられる。古代では8世紀後半に倉庫様の掘立柱建物1棟が出現し、9世紀前半には真北方向を軸とした縦横の溝が設けられるが、同期の建物は見られない。その後、空白期を挟み、中世に至り13世紀後半に、新たな屋敷の区割溝も伴った「集村」が出現するが、14世紀までには廃絶する。報告者は「古代の生産域から中世の居住域への変化」と総括する。  
文献A：熊谷葉月 2000 『金沢市南新保E遺跡』(財団法人石川県埋蔵文化財センター)

### 第2節 南新保C遺跡の既往の調査

平成8～9年度に今回の調査区の東北東約200mで調査が行われている(第2図参照)。集落の形成は弥生時代中期後半と考えられる。該期の建物は「具体的な遺構として確認できなかった」が、報告者が指摘するとおり、調査区南東を東北に流れる自然河道SD03や土坑・溝からの豊富な遺物量から推して、この時期における集落の存在はほぼ間違いないであろう。弥生時代後期後半には建物群に接するように方形周溝墓が展開するようになり、古墳(南新保1・2号墳)の時期近くまで造営が続く可能性が想定されている。南新保2号墳からの銅鋼の出土が特筆される。中世では井戸と区画溝を伴う総柱掘立柱建物が確認されている。

文献B：伊藤雅文ほか 2002 『金沢市南新保C遺跡』(財団法人石川県埋蔵文化財センター)



第3図 周辺の遺跡(文献Bから)

## 第3章 遺 構

### 第1節 概 要(第4図)

弥生時代中期では自然河道NR01が調査区のほぼ中央を走る。古代では井戸SE01を調査区西部で検出した。その他、NR01埋積後に掘られたSD02や調査区西北隅のSD01なども、覆土から類推して古代に属すると考えられる。

なお、NR01の形状・覆土から、後世(中世以降か)にベースとなる地山(淡黄褐色粘砂)の上面まで削平を受けている可能性が高い。また、南新保地区では現在も梨の生産が盛んで、調査区の付近(現在は病院駐車場)もかつては梨畑であった。調査区内でも果樹の植栽痕が散見された。以上の2点は、今回の調査区内における遺構の希薄さと関連すると想定される。

### 第2節 自然河道(第5図)

NR01を検出した。約35mにわたり調査区を東西に横切る。東端部の底が標高2.6m前後、西端部の底が標高2.7m前後であることから、東流する可能性が高い。また、流路が蛇行することから、自然の河川の一部とみなされる。幅は西端で約2m、東端で約4m、中央部で約6mである。

流路中心の深い部分の形状から考えて、幅3～4mクラスの小河川であろう。検出面からの深さは20～30cm前後と比較的浅い。また、中央の深い部分では上面から底部まで覆土が粗粒の砂質土で占められることが多く、上部が削平を受けていると判断される。

出土遺物の大半は弥生時代中期後半の資料である。流路の下流200m余りの地点には南新保C遺跡の同時期の自然河道・SD03(幅10m以上、底面の標高1m以下、第2章文献B参照)が東北に流れており、それに合流する支流である可能性が高い。

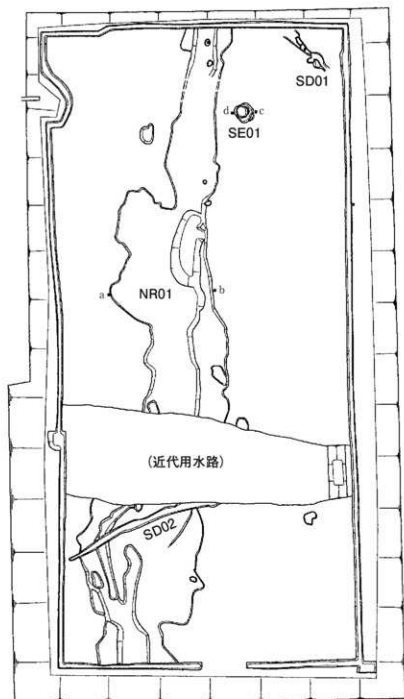
### 第3節 井 戸(第5図)

調査区西部、NR01の北方1mの地点でSE01を検出した。曲物を井戸枠としており、覆土から須恵器無台杯(第6図18)が出土していることから、9世紀に位置付けられる。

枠となる曲物は一段分(第7図W1a・W1bとして図化)が遺存しており、土圧による歪みが大きいものの、直径60m(2尺)前後、高さ40cm前後と推定される。なお、もう一段下に曲物が存在していた状況が土層断面図における垂直に立ち上がるラインから窺われるが、すでに腐朽してしまっているようである。曲物の背後には奥行き5～20cmの掘方が伴う。検出面からの深さは約90cmである。

覆土は有機質に富んだ黒灰色の粘質土を主体とし、掘り部分では地山ブロックが混じる場合が多い。この井戸はベース(検出面)となる淡黄褐色粘砂を掘り抜いてはいるが、その下の暗灰褐色粘土層中に底面を設けており、透水層まで達していない感がある。したがって、水溜めの機能も想定できようか。なお、斎串(第7図W2)も出土している。

因みにこの井戸に示される9世紀という時期は、本遺跡の既往の調査において、真北を軸にした整然とした区画溝が掘削される時期にあつたっており、建物の不在から耕作地としての土地利用が推定されている(第2章文献A参照)。



第4図 調査区全体図(S=1/200)

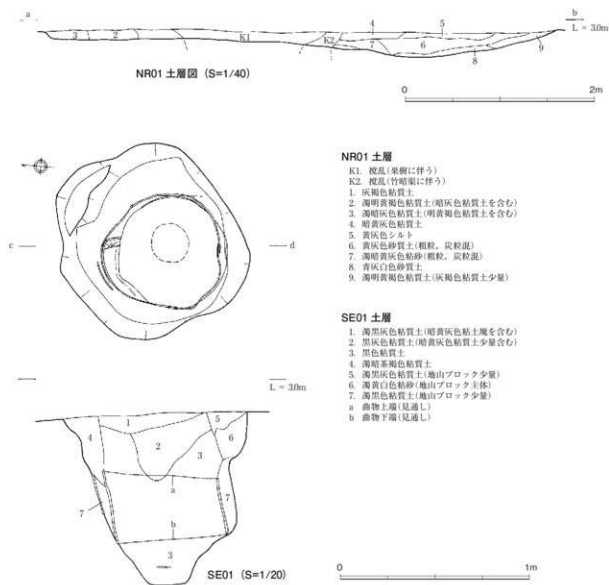


## 第4節 溝(第4図)

先述のとおり、SD01・02の2条を検出しているが、いずれも部分的な把握にとどまる。

調査区西北隅で検出されたSD01は深さ10cm余りで南西から北東に向けて走る。延長3m弱を確認しているが、溝を維持するための掘り直しの影響もあってか、幅は30～60cmと一定しない。覆土は濃茶灰色粘質土で、下部に地山ブロックが混じる。一方、NR01埋積後に掘られたSD02は、南東から北西に向けて8m近くが検出できた。幅は40cm前後で概ね一定しており、確認できた深さは5～10cm程で、覆土は黒味を帯びた濃暗茶褐色粘質土を主体とする。

上記の2条はいずれも流水の痕跡がないことから、区画溝と考えられる。出土遺物に恵まれないため、遺物全体を概観して古代に位置付けることが穏当であろう。その場合、SD01の主軸は90度補正して真北から約40度西に振れることになり、本遺跡の既往の調査における8世紀後半の掘立柱建物のそれと合致することになる。



## 第4章 遺 物

### 第1節 弥 生 土 器(第6図1～14)

自然河道NR01から弥生土器が出土している。1は東海系の「大地系土器(大地壺)」の系譜に属すると考えられる。曲線的に外反する口縁で、肩部のやや下位に瘤状の突起(12個と推定される)をめぐらし、その下に綾杉文帯が垂下する。綾杉文帯間は7～8条からなる縦の集合沈線で充填される。形状からは鉢とした方がよいであろう。径数mmの花崗岩風化物由来の角礫を含む特徴的な胎土である。中期前半に遡る可能性がある。

2～14は中期後半に位置付けられる資料である。2～5は壺で、横に大きく開く3の口縁内面は櫛描波状文・簾状文で加飾され、口縁端部の上下にキザミが伴う。4の口縁内面上端、5の口縁外面上端には綾杉文がみられる。5は口縁が内湾し、底部付近の内面には横方向のハケの上に放射状のナデが伴う。7・8は甕である。前者は口縁上端が強く横ナデされ、上端がつまみあげられる。8の内面上端には斜行短線が、同じく外面にはキザミがみられる。9～11は口縁部で、細片のため器種は不明である。いずれも口縁端部にキザミを伴う。胴部6では肩部外面に櫛描波状文・簾状文が施される。12は底部で、5のそれと同様に底部から胴下半部にかけて直線的に開く形状を呈する。

13は高杯の脚部と考えられる。比較的中空部が広く、外面に櫛描の直線文が横に走る。残る14は鉢であろう。口縁は外反するものの屈曲が弱く、胴部に比して器壁が肥厚した感じとなっている。

以上の資料からNR01出土土器の主体は中期後半、金沢平野では金沢市磯部運動公園遺跡(増山仁 1988 「金沢市磯部運動公園遺跡」金沢市教育委員会)から同専光寺養魚場遺跡(増山仁 1992 「金沢市専光寺養魚場遺跡」金沢市教育委員会)に併行する時期に位置付けることができると考えられる。

### 第2節 土 師 器(第6図15)

15は外面を赤彩した高杯の脚部で、内面に卷上げ痕や絞り痕が観察できる。古墳時代前期頃に属するものと考えられる。調査区内では、ほかにこの時期に位置付けられる資料は見当たらない。

### 第3節 須 恵 器(第6図16～18)

調査区内から奈良・平安時代の須恵器が出土している。本遺跡の既往の調査(第2章文献A参照)における出土品の時期幅(8世紀後半～9世紀前半)に概ね合致するようである。16・17は有台杯の底部である。前者は高台下端面を含む底部外面全体に降灰がみられ、窯詰めの際に最上位に倒置されたものと推定できる。底部から体部への屈曲が明瞭である。後者には低いながら幅広の高台が付き、底部外面全体のナデ調整は丁寧である。胎土中に赤色粒がみられる。SE01出土の18は無台杯の底部で、薄手で体部が横に開く。胎土は灰白色で軟質である。全形が不明ながら9世紀後半以降に降る可能性も考えられる。

## 第4節 石器(第7図S1・S2)

NR01から打製石斧(S1)と石鎌(S2)が各1点出土しており、第1節に記した土器の年代から弥生時代中期後半のものである可能性が高い。S1は砂岩系の石材を用い、片面に自然面を残す。基部側が大きく失われており、先端部のみが残る。S2は輝石安山岩とみられる黒っぽい石材を用いた、長身の石鎌で基部は平基に近い。

## 第5節 木製品(第7図W1a・W1b・W2)

W1aとW1bは同一個体の曲物で、SE01の井戸枠である。遺構掘削時、すでに土圧で歪み、亀裂が縦横に走る状態であった。完掘後に周辺を大きく掘り慎重に取上げを試みたが、予想以上に脆弱で形状を保ったままで取上げることはできなかった。ここでは側板を代表する部分であるW1aと、帯部であるW1bに分けて報告する。前者は重ね合わせ部分にあたり、樹皮によって縦じらされている。

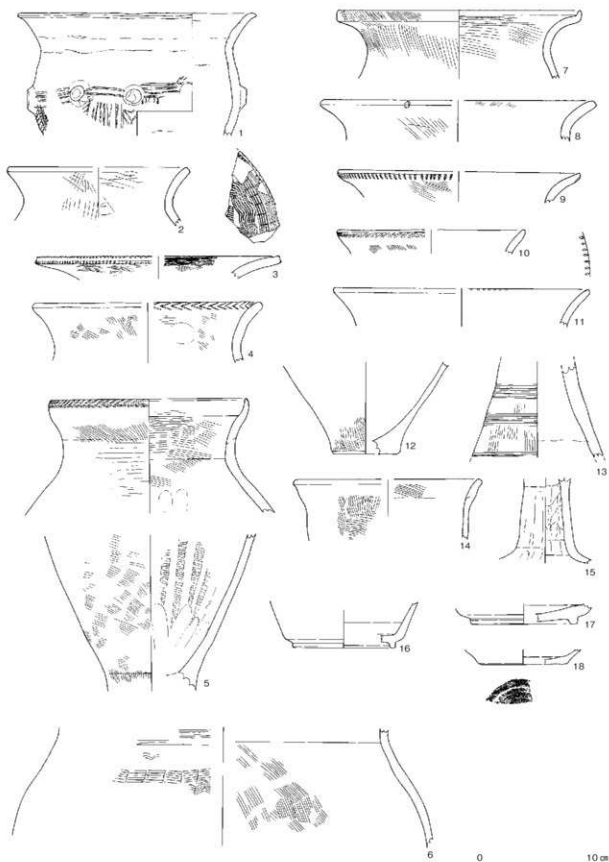
裏面には細いケビキのほか、縦方向の沈線もみられる。後者では裏面にケビキがみられるほか、木釘が数個残る。

W2はSE01の枠内の覆土下層から出土した斎申である。上端を鈍く尖らせ、その直下に両側から切込みを入れている。中程のやや下方で折損する。長さ約31cm、幅約2cmを測り、先端部を鋭く尖らせている。

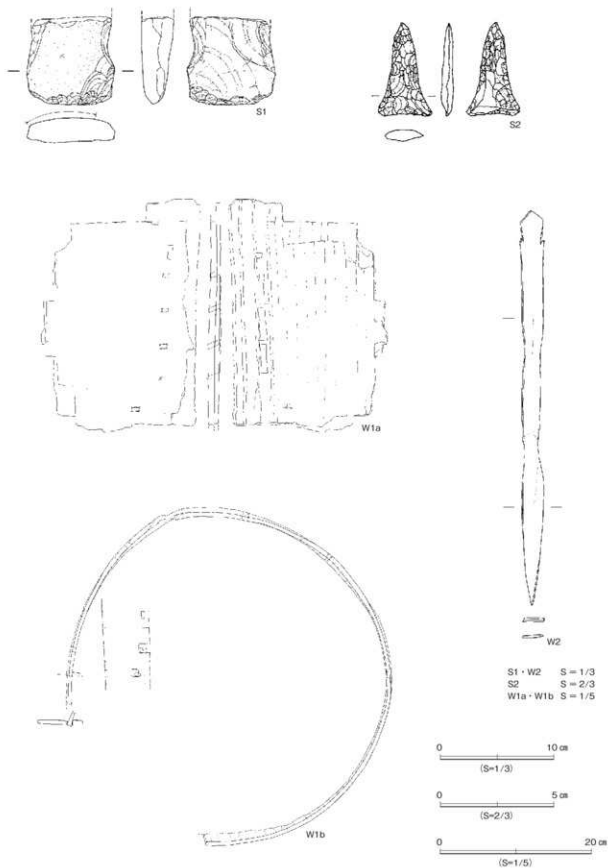
# 第5章 総括

これまで述べてきたことを再度振り返り、簡単にまとめた。弥生時代では調査区中央を自然河道NR01が東に流れており、出土遺物から弥生時代中期後半の小河川と考えられる。川筋中央の深い部分の覆土がすべて粗い砂質土(流水に起因する堆積土)で占められる傾向がみられることから、後世の削平により上部が失われている可能性が高い。この川は調査区の東方約200mで、南新保C遺跡の既往の調査(第2章文献B参照)で検出された同時期の自然河道(SD03)に合流すると考えられる。南新保C遺跡ではこの時期に集落が形成されていた可能性が指摘されており、その点を踏まえれば、本遺跡における当該期の遺物の出土をその集落のテリトリー(活動領域)の一端として評価することもあるいは可能なかもしれない。

古代の主な遺構は井戸(SE01)1基である。井戸枠として曲物が用いられている。1段分が遺存していたのみであるが、土層断面図からその上にもう1段積まれていたと想定される。枠内の覆土下層から斎申が出土した。底面は粘土層中の設けられており、その下位に堆積が予想される砂層まで達しておらず、自噴したのではなく溝などで導水した水を溜める井戸である可能性が高い。出土した須恵器無台杯(第6図18)から9世紀に属すると考えられる。その他、SD01の主軸方向が、本遺跡の既往の調査(第2章文献A参照)の8世紀後半の掘立柱建物のそれと直交する関係であることも注意されるが、残念ながらSD01自体は出土遺物に恵まれず、時期を特定することは難しい。



第6図 土器実測図(S=1/3)



第7図 石器・木製品実測図

第1表 土器一覧表

採回番号	実測番号	出土地点	種別	器種	計測値 (cm)	備考	
第6回	1	B1	NR01(東部)	弥生土器	壺	口径18.2	大地壺、瘤状突起、縦杵文、内外ナデ
	2	B11	NR01(西部)	弥生土器	壺	口径14前後	内外ハケ+ナデ
	3	B7	NR01(東部)	弥生土器	壺	口径19前後	口縁端部上下にキザミ、内面に髷描波状文・縦状文
	4	B10	NR01(西部)	弥生土器	壺	口径18前後	口縁内面に縦杵文、内外ハケ+ナデ
	5	B6	NR01(西部)	弥生土器	壺	口径15.5、底径7前後	口縁内湾し縦杵文、内外ハケ+ナデ、内底に放射状のナデ
	6	B15	NR01(西部)	弥生土器	胴部	-	外面に髷描波状文・縦状文
	7	B2	NR01(西部)	弥生土器	甕	口径19.3	内外ハケ、口縁端部横ナデ・つまみあげ、外面スス付着
	8	B12	NR01(西部)	弥生土器	甕	口径21前後	口縁端にキザミ、口縁内面斜行短線
	9	B14	NR01(西部)	弥生土器	口縁部	口径19前後	口縁内面にキザミ
	10	B8	NR01(西部)	弥生土器	口縁部	口径15前後	口縁外面に斜行短線状のキザミ
	11	B9	NR01(西部)	弥生土器	口縁部	口径20前後	口縁外面にキザミ
	12	B5	NR01(西部)	弥生土器	底部	底径5.4	外面ハケ、外面スス付着、表面摩耗
	13	B3	攪乱	弥生土器	高杯	-	外面に髷描直線文
	14	B13	NR01(西部)	弥生土器	鉢	口径15前後	口縁上端横ナデ、その他ハケ、外面スス付着
	15	B4	調査区壁	土師器?	高杯	-	外面赤彩、内面色き上げ痕・しほり痕
	16	D3	攪乱	須恵器	有台杯	底径8.2	底部外面で降灰が顕著
	17	D2	NR01 覆土上面	須恵器	有台杯	底径8.5	外底に丁寧なナデ
	18	D1	SE01	須恵器	無台杯	底径7.0	灰白色で軟質、体部横に聞く、外底へラ切り+ナデ

第2表 石器一覧表

採回番号	実測番号	出土地点	種別	器種	計測値 (cm)	備考	
第7回	S1	石1	NR01(西部)	石器	打製石斧	残存長7.0、残存幅7.0	基部側折損、厚さ26.、残存重量161g、砂岩系
	S2	石1	NR01(西部)	石器	石鏃	長3.7、幅2.2、厚0.5	重量2.2g、輝石安山岩?

第3表 木製品一覧表

採回番号	実測番号	出土地点	種別	器種	計測値 (cm)	備考	
第7回	W1a	木2	SE01	木製品	曲物	-	側板部(W1bと同一個体)、内面ケビキ
	W1b	木3	SE01	木製品	曲物	高7.7	帯部、井戸杓、内面ケビキ、木釘
	W2	木1	SE01	木製品	漆串	長31.3、幅2.0、厚0.3	折損あり



全景(上が北)



調査区全景(西から)



SE01 完掘狀況



SE01 土層





表土除去



遺構検出



遺構検出状況



遺構掘削 (NR01)



遺構掘削 (SE01)



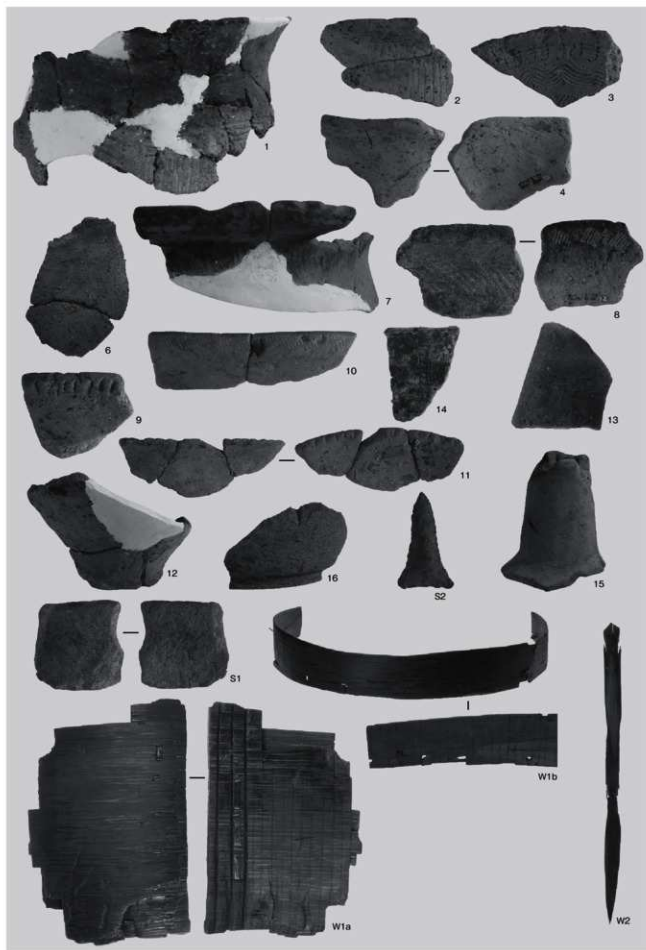
SD01 (北部)



SD02



測量作業



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	かなざわし みなみしんぼ いせき							
書名	金沢市 南新保E遺跡							
副書名	石川県立中央病院がん治療施設整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	松山和彦							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18-1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731							
発行年月日	2011年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
南新保E遺跡	金沢市鞍月東2丁目	17201	01292	36° 35' 46"	136° 37' 44"	20091028 ～20091211	730 m <sup>2</sup>	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南新保E遺跡	集落	弥生時代 平安時代	自然河道1 井戸1	弥生土器、石器 須恵器、曲物、斎串		弥生時代中期後半の自然河道1条と平安時代前期の井戸1基を検出。		
要約	金沢平野北部に位置する集落遺跡である。弥生時代中期後半の自然河道1条を検出した。東流して南新保C遺跡の既往の調査で確認された自然河道に合流すると推定される。また、平安時代前期に属する井戸1基を検出した。井戸枠に曲物を用いており、覆土中から斎串が出土した。							

### 金沢市 南新保E遺跡

発行日 平成23(2011)年3月31日

発行者 石川県教育委員会  
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地  
電話 076-225-1842(文化財課)

財団法人 石川県埋蔵文化財センター  
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1  
電話 076-229-4477  
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社中川印刷